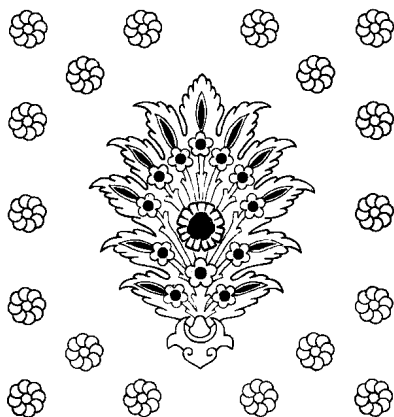


日本文学全集 13



小林多喜二
徳永直



集英社

日本文学全集

全88巻



43 小林多喜二集
徳永直

昭和四十九年六月八日 初版
昭和五十六年十月三十日 七版

著者 小林多喜二
徳永直

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

〒100 東京都千代田区一ツ橋二丁目10番

電話 出版部 東京(28) 六四〇〇
販売部 東京(23) 三六二〇

印刷 中央精版印刷株式会社

著者との了解により刷印中止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたしません。

編集委員

伊藤 整
井上 靖
中野 好夫
丹羽 文雄
平野 謙

挿 装
絵 幀

松 後
田 藤
穰 市三

目次

小林多喜二集

人を殺す犬

七

雪の夜

一〇

滝子其他

二六

防雪林

四一

蟹工船

二五

徳永直集

最初の記憶

一八九

太陽のない街

三〇三

あぶら照り

注解

作家と作品

年譜

三六

三八五

紅野敏郎

三九五

四三七

小林多喜二集

我々の藝術は

飯を食えない人に
とつての料理の存在が
あつてはならぬ。

三二二二二。

小林久蔵

人を殺す犬

右手に十勝岳が安すっぱいペンキ画の富士山のように、青空にクッキリ見えた。そこは高地だったので、反対の左手一帯はちょうど大きな風呂敷を敷にして広げたように、その起伏がズウと遠くまで見られた。その一つの皺の底を線が縫って、こっちに向ってだんだん上ってきている。釧路の方へ続いている鉄道だった。十勝川も見える。子供が玩具にしたあとの針金のようだった、がところどころだけまぶゆくギラギラと光っていた。――「真夏」の「真昼」だった。遠慮のない大陸的なヤケに熱い太陽で、その辺から今にもポッポッと火が出そうに思われた。それで、その高地を崩していた土方は、まるで熱いお湯から飛びだしてきたように汗まみれになり、フラフラになっていた。皆の眼はのぼせて、トロンとして、腐った鱗のように赤く、よどんでいた。

棒頭が一人走っていった。

もう一人がその後から走っていった。

百人近くの土方がきゆうにどよめいた。「逃げたなあー」

「何してる！ ばか野郎、馬の骨！」

棒頭は殺気だった。誰かが向うでなくられた。ポクン！ 直接に肉が打たれる音がした。

この時親分が馬でやってきた。二、三人の棒頭にピストルを渡すと、すぐ逃亡者を追いかけるように言った。

「ばかなことをしたもんだ」

誰だろう？ すぐつかまる。そしたらまた犬が喜ぶ！ 眼下の線路を玩具のような客車が上りになっているこつちへ上ってくるのが見えた。疲れきったようなバシユバシユという音がきこえる。時々寒い朝の呼吸のような白い煙を円くはきながら。

*

*

その暮れ方、土工夫らはいつものように、棒頭に守られながら現場から帰ってきた。背から受ける夕日に、鶴尖やスコップをかついでいる姿が前の方に長く影をひいた。ちょうど飯場へつく山を一つ廻りかけた時、後から馬の蹄の音が聞えた。捕かまった、皆そう思い立ち止まって、振り返ってみた。源吉だった。

源吉はズブ濡れの身体をすっかりロープで縛られてい

た。そしてその綱の端が棒頭の乗っている馬につながられていた。馬が少し早くなる(早くするのだ)逃亡者はでんぐり返って、そのまま石ころだらけの山途を引きずられた。半纏が破れて、額や頬から血が出ていた。その血が土にまみれて、どす黒くなっている。

皆は何んにも言わないで、また歩きだした。

(体を悪くしていた源吉は死ぬ前にどうしても、青森に残してきた母親に一度会いたいとよくそう言っていた。二十三だった。源吉が、二日前の雨ですっかり濁って、渦を巻いて流れていた十勝川に、板一枚もって飛びこんだということはあとで皆んなに分った)

*

*

飯がすむと、棒頭が皆を空地に呼んだ。

まただ！

「俺ア行きたくねえや……」皆んなそう言った。

空地へ行くと、親分や棒頭たちがいた。源吉は縛られたまま、空地の中央に打ちぶせになっていた。親分は犬の背をなでながら、何か大声で話していた。

「集まったか？」大将がきいた。

「全部だなあ？」そう棒頭が皆に言うのと、

「全部です」と、大将に答えた。

「よし、初めるぞ。さあ皆んな見てろ、どんなことに

なるか！」

親分は浴衣の裾をまくり上げると源吉を蹴った。「立てー」

逃亡者はヨロヨロに立ち上った。

「立てるか、ウム？」そう言って、いきなり横ッ面を拳固でなぐりつけた。逃亡者はまるで芝居の型そっくりにフラフラとした。頭がガククリ前にさがった。そして唾をはいた。血が口から流れてきた。彼は二、三度血の唾をはいた。

「ばか、見ろいッー」

親分の胸がハダけて、胸毛がでた。それから棒頭に「やるんだぜー」と合図をした。

一人が逃亡者のロープを解いてやった。すると棒頭がその大人の背ほどもある土佐犬を源吉の方へむけた。犬はグウグウと腹の方でうなっていたが、四肢が見えているうちに、力がこもってゆくのが分った。

「そらッー」と言った。

棒頭が土佐犬を離した。

犬は歯をむきだして、前足をのぼすと、尻の方を高くあげて……源吉は身体をふるわしていたが、ハッとして立ちすくんでしまった。瞬間シーンとなった。誰の息づかいも聞えない。

土佐犬はウオツと叫ぶと飛びあがった。源吉は何やら

叫ぶと手を振った。盲目が前に手を出してまぎるような恰好をした。犬は一と飛びに源吉に食いついた。源吉と犬はもつれあって、二、三回土の上をのたうった。犬が離れた。口のまわりに血がついていた。そして犬は親分のまわりを、身体をはねらしながら二、三回まわった。源吉は倒れたままちよつとの間、ビクビクッと動いていた。がフラフラと立ち上った。と土佐犬は吠えもせず飛びかかった。源吉はひとたまりもなくはね飛ばざれて、空地を区切っている塀に投げつけられた。犬はまたせまった！源吉は大の方に向きなおった。そして塀に背をもたせ、背中ですって立ち上った。皆んな思わずその方を見た。こっちに向けた顔はすっかり血だらけで分らなかつた。その血が顎から咽喉を伝って、すつかりムキだしにされて、せわしくあえいでいる胸を流れるのが分った。立ち上ると源吉は腕で顔をぬぐった、犬の方を見定めようとするようだった。犬は勝ち誇ったように一吠え吠えると、瞬間、源吉は分けの分らないことを口早に言ったか、と思うと、

「怖かない！ オツ母ッ！」と叫んだ。

そしてグルッと身体を廻すと、猫がするように塀をもがいて上るような恰好をした。犬がその後から喰らいつ

いた。

その晩棒頭が一人つき添って土方二人が源吉の死骸を

かついで山へ行つた。穴をほってうずめた。月夜で十勝岳が昼よりもハッキリ見えた。穴の中にスコップで土をなげ入れると、下で箱にあたる音が不気味に聞えた。

帰りに一人が、ちょうど棒頭の小便をしていた時、仲間「だが、俺アなあキツトいつかあの犬を殺してやるよ……」と言つた。

雪の夜

一

仕事をしながら、龍介は、今日はどうするかと思つた。もう少しで八時だった。仕事が長びいて半端な時間になると、龍介はいつでもこの事で迷つた。

地下室に下りていって、外套箱を開けオーバーを出して着ながら、すぐに八時二十分の汽車で郊外の家へ帰ろうと思つた。停車場は銀行から二町もなかつた。自家も停車場の近所だったから、すぐ彼はうちへ帰れて読みかけの本が読めるのだった。その本は少し根気の要るむずかしいものだったが、龍介はその事について今興味があつた。彼には、彼の癖として何かのつまずきで、よくそれつきり読めずに、放つてしまふ本がたくさんあつた。

龍介はとにかく今日は真直に帰ろうと思つた。

宿直の人に挨拶をして、外へ出た。北海道にめずらし

いベタベタした「暖気雪」が降っていた。出口にちよつと立ち止まって、手袋をはきながら、龍介は自分が火の気のない二階で「つくねん」と本を読むことをフト思つた。彼はまるで、一つの端から他の端へ一直線に線を引きように、自家へ帰ることがばかしくなつた。彼は歩きだしながら、どうするかと迷つた。停車場へ来るとプラットフォームにはもう人が出ていた。

龍介はポケットに手をつこんだままちよつと立ち止まつた。その時汽笛が聞えた。それで彼はホツとした気分を感じた。彼は線路を越して歩きだした。後で踏切りの柵の降りる音がして、地響が聞えてきた。

龍介は図書館にいるTを訪ねてみようと思つた。汽車がプラットフォームに入ってきた。振り返ってみると、停っている列車の後の二、三台が家並の端から見えた。彼はもどろろか、と瞬間思つた。定期券を持つていたからこれから走つて間に合うかもしれない。彼は二、三步もどつた。がそうしながらもあやふやな気があつた。笛が鳴つた。ガタンガタンという音が前方の方から順次に聞えてきて、列車が動きだした。そうなつてしまふと、今度はハッキリ自家へ真直に帰らなかつたことが、たまらなく悔いられた。取り返しのないことのように考えられた。龍介は停車場の前まで戻つてきてみ

た。待合室はガラシとしていてストーヴが燃えていた。その前に、印も何も分らない半纏を着て、ところどころ切れて脛の出ている股引をはいた、赤黒い顔の男が立っていた。汚れた手拭を首にかけていた。龍介は今度は道をかえて、賑やかな通りへ出た。歩きながら、あの汽車で帰ったら、もう家へついて本でも読めたのに、と思つた。が一方、そういうのはつきりしない自分をくだらなく思つた。そしてこんなことはすべて、彼は恵子との事から来ていると思つた。が龍介は頭を振つた。彼にとつて、恵子との記憶は不快だつた。記憶の中に生きている自身があまり惨めに思えたからだつた。

その通りはころもち上りになっていて、真中を川が流れていた。小さい橋が二、三間おきにいくつもかけられていた。人通りが多かつた。明るい電燈で、降ってくる雪片が、ハッキリ一つ一つ見えた。風がなかつたので、その一つ一つが、いかにものんきに、フアララ音もさせずに降っていた。活動常設館の前に来たとき入口のボックスに青い事務服を着た札売の女が往來をぼんやり見ていた。龍介はちょっと活動写真はどうかと思つた。が、初めの五分も見れば、それがどういふプロセスで、どうなつてゆくか、ということががすぐ見透く写真ばかりでは救われなかつた。しかし今ここに來ている

ちよつと評判のいい最後のだけ見たい氣になつた。戻つて入つてしまふか、「入つてさえしまえば」こんな氣持にきまりがつく、そう思つた。が、そんなことを意識してする自分が、とうとう惨めに考えられた。彼はよしした。龍介は賑やかな十字街を横切つた。その時前からくる二人をフト見た。それは最近細君を買つた銀行の同僚だつた。彼は二人から遠ざかるように少し斜めに歩いた。相手は彼を知らないで通り過ぎた。ちよつと行つてから彼は振りかえつてみた。二人は肩を並べて歩いてゆく。やつてやがると思つた。が振りかえつた自分に赤くなつた。

図書館は公園の中にあつた。龍介は歩きながら、Tがいなかつたら、また今晚は愛に調子が狂うかもしれないと思つた。そう思うと何んだかいなかもしれない氣がしてきた。が図書館の入口の電燈が見え始めた時彼は立ち止まつた。なぜ自分はこゝ友だちのところへ行くのか、と考へた。友だちを訪ねることが何か自分の氣持にしっかりしたところのないことから來ており、それが友だちにハッキリ見られる氣がした。

——入つていって、「遊びに來た」と言う。その時相手がいかにも落着いた態度で出てきたら、手にペンでも(本でもいい)持つて出てきたら、その時こそ惨めな自

分が面と面を突きあわすことを露骨に感ぜさせられるだろう。それにはかなわない。

——上りになっていた道をむしろ早足で歩いてきたので身体が熱かった。Tのいる室に明るく電燈がついているのが見えた。そこで机の前に坐り、外のことはちっとも気を散らさずに、自分の仕事をしているTがすぐ想像できた。そんなところへこのあやふやな気持を持ってゆき、それをゴマかすためにためらめをむちゃくちゃにしゃべる！ とんでもないことだ！ ことごとこんな自分が情けなく思つた。彼は戻りかけた。しかしもう気持が、寄れないところへ行つていた。彼は別な、公園の道に出た。そこは市役所の裏で暗かった。道の両側には高い樹が並んで立つており、それが上の方で両方枝を交えていた。そして、まだ落ちていない葉にさわる雪のかすかな音が、ずうと高い所から聞えた。

龍介はもう一人、画をかくSに会いたかった。しかしこれからすぐ停車場へ行けば九時十分の汽車に間に合う。それからでも家で何か勉強できる気がした。とにかく気持をどっか一方へ落着かせたかった。

二

高台になっていゝる公園からは街が一眼に見えた。一番

賑やかな明るい通りの上の空が光を反射していた。龍介は街に下りる道を歩きながら、

——俺はいったい何がしたいんだろう、と考えた。しかし分らなかつた。分らない？ フンこんなばかな理窟の通らない話があるか、そう思い、龍介は独りで苦笑した。

龍介は街に入ると、どこかのカフェーに入つて、Sに電話をかけてみようと思つた。が彼の通つてゆく途中の一軒一軒が、彼を素直な気持で入らせなかつた。結局、彼は行きつけの本屋に寄つて、電話を借り、Sにかけた。交換手がひつこんで、相手が出る、その短かい間、龍介は「いてくれれば」という気持と「かえつていないでくれれば極りがつく」という気持を同時に感じた。相手が出ぬ前、受話機をかけてしまふかと思ひ、ためらつた、がその時電話口にSの妹が出た。Sはいなかつた。彼はがっかりした。今晚はまただめになつたと思つた。本屋を出たとき龍介は、ギョツとした。——恵子だ！ 明るいつころからなので、視覚がハッキリしなかつた。が、電気のようにピリンとそういう衝撃が来た。龍介には見なおせなかつた。見なおすよりもまず自身を女からかくす、それが第一だつた。彼は暗がりへ泥濘をはね越すように、身を寄せた。——が恵子ではなかつた。ホツと

すると、自分が汗をかいていたのを知った。ひとりでも赤くなった。

龍介は街を歩く時いつも注意をした。恵子と似た前からくる女を恵子と思い、友だちといっしょに歩いているときでもよくきゆうに引き返して、小路へ入った。恵子は大柄な、女にはめずらしく前開きの歩き方をするので、そんな特徴の女に会うと、そのたびに間違つてギョツとした。不快でたまらなかつた。

龍介の恵子に対する気持はいろいろな経過をふんでからの、それから出てきたものだった。かなり魅惑のある恵子が、カフエーの女であるということから受ける当然の事について気をもみだした、それが最初であつた。彼はそういう女がいろいろゆがんだ筋道を通つてゆきがちなのを知つていた。その考えが少しでも好意を感じている恵子に来たとき、「ちよつと」平気でおれなかつた。この平気でおれない「関心」が、龍介の恵子に対する気持を知らない間に強めていった。しかし一方、彼は自分が身体も弱く金もないというこの意識でそういう気持を抑えていった。彼は自分の恋愛をたんに情熱の高さばかりで肯定してゆく冒険ができなかつた。彼にとって、そんな冒険はできない、というより、そんな「不道徳なこと」はできない、といった方がより当つている。そう

だつた。そしてその二つが同じように進んでいるとき、龍介は気軽に女と会えた。恵子がかえつて彼に露骨な好意を見せた。女から手紙が時々来た。「あなたがかかる気が朝からしていた。が、とうとうあなたはお見えにならない。胸が苦しくなる想いで寝た」そんなことなど書かれていた。恵子についていろいろ噂が龍介の耳に入つた。恵子が淫売（ヤン）をしていふといふことも聞いた。それについて入念な——“*Eternal Prostitution*” “*Periodical Prostitution*” “*Five yen a time*” とさうような言葉までできていた。彼はその事について、恵子にたずねた。

恵子は——「そんなことでしたら、誰がなんと言おうと私を信じてもらつてもいいの——」と言つた。恵子が淫売で拘留されたことがあるとか、家の裏に抜穴があるとか、もつと詳しいことが噂立つた。龍介はイライラしてきた。恵子を信じていても、やはりそんなことがいろいろに意識のうちに入つてきて、不快だつた。しかしそれと同時に、彼は恵子をすっかり自分のものにしたたい気持を感じだして来た。しつこい強さで来た。龍介は危い自分を意識したが、だめだつた。彼の気持はずうと前に行つてしまつていた。彼はそのことを打ち明けるのに、市から汽車に乗つて三十分ほどで行けるZの海岸にしよつと考へた。その海岸は眼路もはるかなといつていいほ

ど砂丘が広々と波打っていた。よく牛が紐ひものような尻尾しっぽで背のあぶを追いながら草を食っていた。彼はそこ以外ではいけないと思った。彼はそこでのことをいろいろに想像した。

龍介は他にお客がなかったとき恵子に「Zの海岸へ行く」都合をきいた。言ってしまうと、自分でドキまぎした。

恵子は「どうして？」とききかえした。

「……遊びにさ」

「そうねえ——考えておくわ」と言った。

「考える？」

「でも、いろいろ都合があるし……それに主人にも……」

「そう、じゃ二、三日に来るよ」龍介は外へ出たときホツとした。

彼は二、三日経て行った。恵子は今度の日曜ならいい、と言った。彼は汽車の時間をきめ、停車場で待つことにして帰った。土曜日彼はさしあたり必要のない冬服を質屋に持ってゆき、本を売った。それで金の方は間に合った。次の日停車場へ行った。天気なので、どこかへ出かける人でいっぱいだった。龍介は落ちつかない気持で待合の入口を何度も行ったり来たりした。時計を何度も見

た。それから恵子のくる通りの方へも出かけてみた。汽車がプラットフォームへ入った。恵子は来なかった！

龍介は汽車が出てしまったあと、どうしようか、と思つたが、カフェーへ行つてみた。恵子は手拭を「ねいさん」かぶりにして掃除をしていた。彼が入つてくると、行けなかったことを弁解した。彼は今度の日を約束して帰った。約束の前の晩、彼はこの前のようなことがないように、と思い、カフェーへ出かけてみた。女は彼にちようど手紙を出したところだ、と言ひ、きゆうにまた明日用事ができて行けなくなつたと言つた。そして本当に気の毒そうな顔をした。彼はまたむりをして作つた次の日のための金をそこで使つてしまった。帰つたのが遅かつた。

二、三日して龍介はまたカフェーへ行った。そして今度の日曜にはぜひ行こうといふことにきめて帰つてきた。土曜の暮れ方から雨空になつた。朝眼をさますと土砂降りだつた。龍介はがっかりして蒲団かぶとにもぐりこんでしまつた。変な夢ばかりを見て、昼ごろに眼をさました。これで三度だめになつた。そしてこういうことが、彼の気持をもズルズルにさした。彼はその間ちつとも落ちつけず、何んにも仕事ができなかつた。しかし何回ものこらうということが、かえつて彼の恵子に対する気持を交